

※フレイルとは、加齢に伴い身体・精神・社会的な活力（筋力、認知機能、社会とのつながり）が低下し、健康と要介護の中間に位置する「虚弱」な状態のこと。早期に発見し、適切な運動や栄養摂取、社会参加を行うことで、健康な状態へ戻すことが可能な段階。

下布田遺跡のプレゼンスをリードする陶芸家

福岡県で生まれた安川さん、高校生の時に図書館で偶然目にした、沖縄県八重山諸島の新城島（あらぐすくじま）に伝わるパナリ土器に魅せられてしまった。粘土に貝殻の粒を混ぜて成型した、素朴な形に惹かれたばかりではなく、約二百年ほど前までは作られていたのに作り手が途絶えてしまし、幻の土器と呼ばれていることにもロマンを掻き立てられたに違いない。

今のように何でもインターネットで検索できる時代ではなく、図書館で探して回ってもほとんど情報を得られなかったが、唯一沖縄県立芸術大学の大嶺實清（おおみねじつせい）先生という方がパナリ土器について研究されていることが分かった。それからの安川さんの決断と行動力は、とても高校生とは思えない。進学先は沖縄県立芸術大学で、西表島（いりおもてじま）で現在も作陶を

今回の活躍人は、布田小近くの自宅で陶磁造形の作家として、アーティスト活動をされている安川万里子さん。ただ、布田小に通学されている二人のお子さんの保護者として、あるいは地域の活動に参加される時には反迫（たんさく）さんのお名前前で活躍されておられるので、ちょっと珍しいかもしれない。この記事では、アーティストとしての側面からご紹介したいので、安川さんと呼ばせていただく。

地域の活躍びと

安川 万里子さん

（やすかわ まりこ）



～ 陶磁造形作家 ～

うだ。その結果分かってきたのは、パナリ土器が新城島（パナリ島とも呼ばれる）で行われる島民だけの祝祭、それも秘祭とも言われる行事に深く関係していること。そのため、学術研究と分かっていても古くからの島民の方には、必ずしも歓迎されなかったようだ。人々の間に代々語り継がれてきた信仰や習慣に分け入っていく民俗学の面白さと難しさを体験された4年間であった。



ろくろを回す製作中の安川さん



最後に2023年に日本文化振興プロジェクトで安川さんが優秀賞に輝いた作品「纏（まと）い」について。展示会に回っているため、作品そのものを見せて頂くことは叶わなかったが、同じ「纏い」という作品をいくつか拝見した。美しく繊細な磁器の素晴らしさは言葉では言い尽くせないのと同じく、素敵な造り手についてもなかなか書き尽くせない。

（取材・藤田秀雄）

されておられる高山宗久さんを訪ねあて、高山ご夫妻の元で土器作りを始められたのだ。

そして芸大受験。なんと受験面接を大嶺先生が担当して下さり、もちろん合格。しかし大嶺先生は直後に退官されたため、直接パナリ土器についての教えを受ける機会がなかったのは、やはり今も心残りですと安川さん。それでも後継の先生方や高山宗久さんの指導と支援の下、民俗学の視点から新城島の現地調査に何度も出かけられたのも興味深い。

遺跡があり、縄文土器が発掘されていることを知ったのも転入後のこと。少し大げさだが、安川さんはこの地域に移って来る運命であつたようにさえ思えた。



アルカイック的な文様と
淡い色彩の陶器作品

えって待つて待っている間のおしゃべりを楽しんでいる風情だ。

考えてみればほとんどの来場者は全員、あちこちの遊園地やテーマパークで、本格的な食べ物やイベントの経験があるはず。それでも布田小の夏祭りがカレンダーに印を付けておくほど楽しみなのは、日常の中に突然作られた非日常の空間が楽しいんですよ、とこれは会場でお話を伺った先生の意見。なるほど、昨日授業を受けていた教室が、今日はお化け屋敷に変身して、ヌーと出てきたお化けに友達と一緒にキャーと叫んで大騒ぎをするのは、テーマパークでの楽しさとは別物ですね。



体育館



ロータリー



お化け屋敷



STAGE

